

# 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 鈴木 陽子

鈴木陽子氏の博士論文『日本語の自動詞構文と他動詞構文の習得：空間概念の場合』の審査結果を報告する。本論文は、日本語母語児の自然発話データを分析することによって、自動詞と他動詞の使用の特徴や発達のプロセスを分析し、子どもの自動詞・他動詞構文の習得メカニズムを考察したものである。

日本語には「あくーあける」や「しまるーしめる」のように形態的に似た形を持つ自動詞と他動詞のペアが存在する。これらの動詞は同じ事態を別の視点から叙述する動詞であるため、「どこがあくの？ あけてごらん」のように自動詞と他動詞とが同じ文脈で使い分けられる場合も多い。また、日本語の話しことばでは動詞の必須要素となる名詞句や格助詞が頻繁に省略されるため、実際の発話は動詞の必須要素を欠いた断片的なものが多く、自動詞と他動詞の文法や意味の違いを理解するために必要な言語的情報は少ない。本研究では、このようなインプットから日本語を習得する子どもがどのようにして自動詞・他動詞構文を習得することができるのかという問題に取り組み、1歳6ヶ月から5歳の日本語母語児の自然発話データを分析することによって「あくーあける」のようにペアを成す自動詞と他動詞の使用や学習過程の特徴・メカニズムを明らかにした。「あくーあける」、「しまるーしめる」、「はいるーいれる」、「でるーだす」、「のるーのせる」、「おちるーおとす」の6つの自他動詞対、合わせて12の動詞を対象に、以下3つの研究課題を設定し、分析を行った。

研究課題1：自然発話における自動詞と他動詞の使用、動詞の習得過程の記述

研究課題2：自動詞と他動詞の区別

研究課題3：自動詞と他動詞の誤用の分析

研究課題1に関しては第4章と第5章で、研究課題2に関しては第6章で、研究課題3に関しては第7章で、それぞれ分析結果を論じ考察している。

第2章の理論的枠組みでは、動詞が使用される言語的文脈に注目しつつも言語習得のプロセスへの考えが異なる二つのアプローチである Gleitman (1990) の統語的ブートストラッピング理論と Tomasello (2003) の用法基盤モデルによる言語習得理論とを概観し、比較を論じている。二つの理論は、言語的文脈が動詞の学習プロセスに重要な役割を果たしている点では共通しているが、インプットの役割や言語的文脈に結びつけられた形式や意味が他の語彙や文法項目の習得にどのように関係するかに対して異なる考えを提示している。本研究は、日本語の自動詞と他動詞を含む発話を分析することを通して、統語的ブートストラッピングと用法基盤モデルの二つの考え方のうちどちらのアプローチによる説明が自然発話データに見られる特徴に符合するかを検証した。

第3章ではデータと分析方法について説明している。本研究では、養育者と子どもの縦断的自然発話データベース CHILDES から8つの日本語データを使用し、1歳6ヶ月から5歳の発話データ(174, 146の子どもの発話と198, 243の養育者の発話を含む366のファイル)を分析対象とした。

第4章では、ペアを成す自動詞と他動詞の養育者と子どもの使用の特徴を分析した。自動詞と他動詞の使用頻度では、「あくーあける」以外の動詞について、自動詞の方が有意に使用頻度が高い傾向が確認された。全体の約50%が名詞句を全く含まない発話であり、格標示される名詞句が現れる発話は2.5～10.5%と少なかった。日本語では格助詞や動詞の必須要素となる名詞句が省略されることが多いが、本研究の分析データについても同じ特徴を養育者と子どもの両方の発話において確認した。また、本研究は動詞が活用された形を特定の意味と形式を持った「構文」として捉え、それぞれの動詞が生起する構文の特徴を分析した。その結果、自動詞では結果状態を表すテイル形やタ形が、他動詞では相手に行為を要求するテ形や意思形などの構文が頻繁に使用されていた。ペアを成す自動詞と他動詞の出現頻度には有意差があり、頻繁に使用される構文の種類には違いが見られるなど、自動詞と他動詞の非対称的な言語使用を確認した。このような特徴は養育者と子どもの両方の発話に共通して見られることから、非対称的な特徴を持ったインプットから子どもが統計的学習を行い、それぞれの動詞を学習していることを示唆している。

第5章では、6つの自動詞と他動詞のペアについて子どもが発話する構文の発達を分析した。ペアを成す自動詞と他動詞はほぼ同じ時期に使用され始めるが、初期に現れる構文の多くが頻繁に使用される構文と一致していたことから、インプットにおいて頻度が高く、際立ちの高い形式に基盤を置いて子どもが学習を進めていると考えられる。言語発達が進むにつれて、子どもは同じ動詞についてさまざまな構文を用いることができるようになっていくことも観察でき、その推移を示した。

第6章では、第4章で得られた使用の特徴を踏まえ、どのような情報を手がかりに子どもが自動詞と他動詞の意味と形式を区別し、学習できるかという問題に関して分析と考察を行った。格標識は自動詞構文であるか他動詞構文であるかを判断するために有効な情報であるが、インプットにおける格標識の出現頻度は低く、特に目的格を標示する格助詞「を」はほとんど現れないため、有力な候補であるとは考えにくい。自然談話のなかで交わされる発話の約半分が名詞句を含まない発話だという点を考慮すると、その鍵は構文にあると考えられる。自動詞と他動詞において頻繁に使用される構文の種類には違いがあるため、その手がかりをもとに12の動詞についてクラスター分析を行った結果、おおよそ自動詞群と他動詞群との違いを捉えることができた。この結果から、特定の構文の頻度分布が自動詞と他動詞の違いを区別するために有効であると考えられる。自動詞と他動詞が生起する構文は形式とその頻度において特徴があるばかりでなく、それぞれの構文が持つ発話意図にも違いがある。さらに、テイル形やタ形は結果状態に焦点を当てる構文であることから、事態の変化が生じた後のタイミングで発話されるが、テ形や意思形などは事態の変化を求めるために変化が生じる前に発話される。このように、それぞれの構文が談話内に出現する分布が事態の変化において異なっている。繰り返し使用されることで定着された頻度の高い構文がそれぞれに重要な発話意図を持ち、談話の流れのなかで出現する分布が異なることによって、子どもは自動詞と他動詞のペアを区別するために必要な情報を得ることができると考えられる。

第7章では、自動詞と他動詞の誤用に関する分析を論じている。誤用には、「自他の誤り」、「格助詞の誤り」、「語彙選択の誤り」、「他の構文の代替」、「独創的な構文」、「言いさし」など大きく分けて6つの種類の誤用が観察された。自動詞を他動詞として使用する誤りと他動詞を自動詞として使用する誤りでは、どちらの方向の誤りも観察されるものの、自動詞を他動詞として使用する誤りの方が頻度が高かった。また、誤用が生じる構文はテイル形やテ形などそれぞれの動詞で頻度の高い構文であったことから、誤用が生じるメカニズムの背後にインプットにおける頻度分布やより定着した構文であるかどうかに関わっていると考えられる。また、子どもは全く異なる発話意図を表す構文を使うような誤り（例えば、相手に何かしてほしい場合にテイル形を使うなど）は殆ど産出しないことから、子どもは自動詞か他動詞かという語彙の選択よりもテイル形や意思形等を用いる構文の形式とそれが表す発話意図に着目し、その構文知識を定着させていると考えられる。

以上の分析結果と考察をもとに統語的ブートストラッピングと用法基盤モデルの二つを比較し、本研究は用法基盤モデルが得られた観察を説明する理論として符合すると結論づけている。ひとつには、用法基盤モデルが予測するように、日本語習得児の自動詞と他動詞の発話はいくつかの具体的な構文から使用が開始していた。子どもの初期の動詞は、2、3の限定的な構文において限定的な対象に対してのみ使用されており、この時期の子どもの動詞に関する言語知識は、大人が持つ知識とは異なっている。統語的ブートストラッピングは、刺激の貧困の考えから不十分なインプットからでは適切な動詞の意味を推論することができないという前提に立つが、本研究で観察した子どもたちはインプットにおいて頻繁に使用される極めて限定的な構文を用いて動詞の使用を開始していた。その後、徐々に子どもは使用できる構文のタイプ数を増やし、さまざまな名詞と組み合わせることができるようになるが、その発達は統語的ブートストラッピングが予測するような早いものではなくゆっくりと進み、インプットで使用される構文を基盤として変化していく過程が観察された。このような観察は動詞の学習プロセスにおいてインプットの役割を重視する用法基盤モデルの考えと合致すると結論づけた。

本研究は、動詞の活用形が特定の意味と結びつく言語単位を「構文」として捉え、子どもの動詞使用の分析を行った。構文を単位として分析することにより、自動詞と他動詞とでは頻繁に用いられる構文の種類に違いがあり、その特徴を子どもは養育者から与えられるインプットから学習していることを示した。使用頻度の高い構文は子どもの動詞使用の初期に現れ、その後の動詞学習の基盤となるため、構文の役割は動詞習得のプロセスを理解するうえで重要である。また、自他の誤りが多く生じる構文の種類においても頻繁に使用される構文の存在に関わっており、語彙と構文の発達プロセスにおいて重要な役割を果たしていることを示した。

平成 29 年 6 月 9 日に行われた審査会において、本博士論文の学術的意義について、以下の審査結果が得られた。

本博士論文は、言語獲得研究において長い間大きな研究問題となってきた自動詞・他動詞の習得に関して、子供と養育者両者の自然発話コーパスを綿密に分析し、その習得の過程・メカニズムを考察する意欲的な論文である。とりわけ、構文の観点から、動詞の活用形がある特定の意味・機能をもつ構文として使われる有様を詳細に示し、日本語を習得する子どもが自動詞と他動詞の意味や文法を区別し習得する手がかりとして、構文の種類が最も有益であることを明らかにした功績は極めて大きい。

特に以下の研究成果が高く評価された。

1. ペアを成す自動詞と他動詞が生起する構文の種類と頻度を分析することによって、子ども・養育者ともに、ペアを成す自動詞と他動詞の使用頻度には有意差があり、生起する構文の種類が自動詞・他動詞間で大きく異なる特徴を持っていることを明らかにしたこと。
2. 養育者の発話においても自動詞と他動詞の使用に非対称性があることを指摘し、養育者から子供が受けるインプットの特徴を明らかにした上で、子どもが頻繁に使用する構文は養育者が頻繁に使用する構文類型と一致しており、子どもが養育者の構文使用に依拠した統計的学習を行っていることを示したこと。
3. 自動詞と他動詞の用いられ方の機能面での違いに着目し、初期に習得される自動詞構文と他動詞構文それぞれの発話意図や機能的特徴を示し、両者の機能的差異を明らかにしたこと。
4. 自動詞と他動詞において頻繁に使用される構文の種類と頻度分布が、自動詞群と他動詞群の違いを区別するために有効であることを、クラスター分析により示したこと。
5. 動詞の誤用を新しい観点から考察し、自動詞と他動詞の誤用にそれぞれの動詞で頻繁に使用される構文の特徴が関わっていることを指摘したこと。「何について誤っていないか」に着目し、子供は動詞の選択において誤るものの、文脈に即した発話意図を表す構文は適切に選択できていること（逆に、動詞を発話意図の異なる構文を用いて誤って使用してしまうような誤りはほぼ観察されないこと）を指摘したこと。
6. これらの分析結果をもとに、統語的ブートストラッピング理論と用法基盤モデル、即ち動詞が使用される言語的文脈に注目しつつも言語習得のプロセスへの見解が異なる二つの言語習得理論を比較し、理論的考察を展開していること。

理論的論証に関しては、本研究において用法基盤モデルを支持する分析成果が得られたものの、言語知識の一般化のメカニズムに関してはさらなる根源的解明が期待されることや、支持されなかった前者統語的ブートストラッピング理論に関してもより綿密かつ詳細な具体的な論証が望まれること等が指摘された。加えて、本研究で（内的妥当性を高めるために）分析対象から外した動詞の用法や多義性の習得に関しても射程を広げることにより、さらに興味深い分析が展開しうること等が議論された。これらの指摘は、本研究が発展拡張的研究に繋がる意義深い基盤研究となりうることをも示唆している。

したがって、本審査委員会は本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。